

寒波至る

帝国暦四九〇年……いや、一七年前に生を受けた時とは、祖国として仰ぐ旗を変えた立場としては宇宙暦でカウントすべきだろう。着信したばかりの私信を表示していた端末画面から視線を移動させ、グレイチェン・ヘルクスハイムは、ふと物思う表情に、透き通った紫水晶^{アメシスト}の瞳をさまよわせた。宇宙暦七九九年が新たなカレンダーを繰り始めて、すでに丸四ヶ月が経過しようとしている。

「激動の四ヶ月……か」

思わずその唇を漏れたフレーズはいささかありふれすぎていて、陳腐と評してもよいほどだったが、正確な事実でもある。

グレイチェンが同盟軍士官学校首都校から任官証書を与えられたのがこの年の二月始め。巡航艦『レディング』での少尉候補生として訓練を経て、最初の任地であるJL二七へ着任したのがその二週間後だった。

最初の軍事衝突であるダゴンの会戦以来、帝国・同盟間の軍事的争覇戦の唯一の舞台がイゼルローン回廊だった。戦いはすでに一五〇年余りにもおよび、永久運動にも似たこの戦いが、この先も永遠に続く。帝国と同盟を問わず、ほとんどの人間にとっての暗黙の了解というべき認識だった。

その認識が一拳に覆ったのが、グレイチェンの赴任直後。同盟政府最高議会議長であるヨブ・トリューニヒトによる、銀河帝国

『皇帝』ウエルウィン・ヨーゼフ二世の『亡命』と、『銀河帝国正統政府』の樹立の発表だった。

「一体、何が起きたんだ？」

正直、それが最初の感想だった。

「じゃあ、これまでの一五〇年の戦いは何だったんだ？俺は兄貴を殺された。祖父^{じい}さんもイゼルローンで死んだし、親父だって、弟がティアマトで戦死したんだ。それをどうしてくれる？」

帝国を絶対的な悪の具現と見なし、その体現者としての銀河帝国皇帝への憎悪に凝り固まった士官は、怒りの蒸気を憤激の言葉と共に吹き上げた。

「いや、これで戦いが終わるんなら、俺は故郷^{ふるさと}に帰れる。家族のところへ帰れるんだ」

一方で、そう安堵の溜息を漏らす兵の数も少なくはなく、たまたま聞きつけた士官が彼らの一人を怒声と共に殴打するという事件まで起きた。士官による『暴力』が同盟憲章で禁止されていたことから、事件は下士官と兵たちからの抗議活動へと発展し、最終的には当事者となった士官と兵士がともに軍法会議に召集される羽目となった。

そこまで思い出し、グレイチェンはちよつと顔をしかめる。軍法会議の裁判長を務めた、彼女の上官のことを思い出したのだ。JL二七駐留艦隊参謀長ヒラーデ大佐は病的な帝国嫌いであり、この軍法会議でも一方的に士官を支持する判断を下したのだ。

「同盟軍人たるの義務を忘れ、帝国皇帝の亡命を、我が身の安全と保身の目から歓迎するなど許しがたい利敵行為だ」

兵には一〇日間の重懲罰房入りと一ヶ月間の給与停止、一階級の降等を命ずる一方で、士官の方は、良く我が軍の名譽を保持し、士氣高揚に資した』として同盟憲章違反を不問に付した。あまつ

さえ『愛国・忠国の衷情のしからしむところの士官よりの下士官・兵への制裁は、単なる暴力とは自ずから性格を異にするものとして論じねばならない』などとコメントまで出したのだ。グレーチェンの目から見ればまったく不要・不急、要するに余計なコメントが、兵たちの不満を煽ったことは言うまでもなく、基地内の士気は目に見えて落ちた。無論、士気云々はグレーチェンの主観だから、ヒラーデの視野には別な光景が映っていたとしても不思議ではない。

ともあれ、エルウィン・ヨーゼフ二世の亡命と銀河帝国正統政府の樹立は、『一五〇年の沈滞』の情性感を一瞬に打ち破る巨大な動きには違いなかった。動に対しては反動、作用に対しては反作用が伴うのが当然であり、しかも、それは同盟の誰もが予想していない速さで返ってきた。トリューニヒトの発表に対する、ローエングラム公ラインハルトによる、いわゆる『懲罰演説』である。ラインハルトは、同盟政府を『卑劣にして陋劣なる犯罪者』と断じ、『犯罪の首謀者への懲罰は帝国政府と帝国軍にとって最高度の優先順位を以て遂行されるべき任務となった』と宣言した。帝国から外交的な譲歩を引き出す、外交上の巨大なカードとして利用しようとした目論見は、ラインハルトのこの一言で崩れ去り、同盟政府はラインハルトによる『懲罰』を恐れ、備えねばならない立場に追い込まれた。皇帝の亡命も、亡命政府の樹立も、同盟に益するところは何もなく、その軍事的・政治的な選択肢にいたずらな枷をはめただけの重荷でしかなくなったのだ。

「それだけではないな……さすがにあの者はやる」

グレーチェンの呟きは、亡命皇帝への保護を巡っての、国内の意見対立を思ったことだった。エルウィン・ヨーゼフ二世は、まだ八歳。しばしばメディアに登場する姿は年相応に幼く、繊細

な容貌は可憐でさえある。

「このような事態を招いたことは我が身の不徳の至りだと思う。自由惑星同盟の人々には深く詫びたい」

など、健気なとも言うべき発言がメディアに載ることも多く、この幼帝の身柄を守ってあくまでラインハルトと戦うべしとする、いわゆる『騎士症候群』患者が急増しているとも聞いた。一方で、彼我の決定的な軍事力の差を理由に、エルウィン・ヨーゼフ二世をローエングラム公ラインハルトに差し出せとの声も上がっており、両者の対立が深刻さを増している……というのが、首都からの便りだった。送り主は無論、彼女の保護者であり後見人でもあるヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング。

そのベンドリングが、いつのまにか中佐として同盟軍情報部対帝国諜報課課長の椅子に座ってしまっているのが、グレーチェンの苦笑を誘った。

「相変わらず、口では楽をしたいといいながら、苦勞の多い方に転がっていくんだからな、ヴェンツェル・ハインリッヒは」

ただし、微笑には嘲りはなく、むしろ信頼と、そう言って良ければ心からの親愛の色合いが強かった。

一方、もう一通の便りがグレーチェンの眉をひそめさせた。こちらは士官学校時代からの親友であるシャルロッタ・ゼーダーシュトレーム……ロツティ・セーデルからだった。検閲のためもあるが、所在は分からない。グレーチェンの顔を曇らせたのは、文面がどうやらロツティが初めての实战を経験したらしく読めることだった。

「第一艦隊……か」

ロツティの配属先は、ウランフ中将隷下の第一艦隊。その第二分艦隊旗艦航法士官が彼女の任務だったはずだ。ロツティが実

戦を経験したとすれば、第二艦隊が帝国軍との戦闘に加わったことになる。

「イゼルローン……か」

その結論しかあり得ない。

そう、ラインハルトは虚言を弄したわけでも、修辞の上で『懲罰』を口にしたのでもなかった。彼の演説から月が替わって直ぐ、イゼルローン要塞は、金銀妖瞳^{ヘテロクロミア}の名将ロイエンタール上級大将指揮する、帝国軍三個宇宙艦隊の包囲下に陥った。

「なに、ヤン提督がおられる限り、イゼルローンが陥るものかね」
基地内に流れた楽観論、幾分かはこのルエウェト星系がそうした華々しい戦いや武勲の場からは遠く離れた位置にあるのだとする他人意識も含まれていただろう。

「三個艦隊が五個艦隊だって、金銀妖瞳^{ヘテロクロミア}が金目銀目の妖怪だって、ヤン提督に叶うわけではない」

しかし、予想に反してイゼルローン要塞はなぜか苦戦した。一度は帝国軍から『要塞内部への侵入に成功せり』との宣言も出され、JL-27ばかりでなく、同盟領内の報道が『帝国軍、大挙侵攻近し！』の悲鳴を盛大に上げ始めた時期すらあったのだ。第一艦隊がイゼルローン回廊へ投入されたとすれば、この時期だろう。それは同時に、同盟軍に三個しか残っていない現役の制式艦隊の内の一つを投入せねばならないほど、追い詰められた戦いだったことを示している。

その後、要塞が帝国軍の侵入を食い止め、戦いが小康状態となった時、第二の、そして決定的な一撃が、今度はフェザン回廊を襲った。

ラインハルト直率の帝国軍主力艦隊によるフェザン侵攻。たまたま、在フェザンの弁務官事務所への連絡に赴いていたグ

レーチェンは、その目で帝国先鋒、黒色槍騎兵艦隊^{シュヴァルツランツェンレイア}の大学来攻を目撃。志願した偵察行で、これが全面的な帝国軍の侵襲である事実を確認したのがほかならぬグレーチェン自身だった。

短期間の内にフェザンを制圧した勢いに任せて、一気にフェザン回廊を突破するかと思われた帝国軍だが、彼らはフェザンで進撃を停止し、思いもかけぬ次のカードを切ってきた。それが、講和への交渉申し入れである。

「ジークフリード、ジークフリード・キルヒアイス、そなたの考えだな」

根拠はない。しかし、グレーチェンには、あの赤毛の若者が、ラインハルトへ進言する姿がはつきり見えたと思えた。あのジークフリードが力任せの同盟領侵攻を、彼を『かけがえのない友人』と呼ぶ黄金の髪の覇者に許すはずがない。

それが、ジークフリード・キルヒアイスに対する慕情から来る、一種の『恋人万能論』に分類されるべきものとの意識は、もちろんグレーチェンにはある。

『自らをも第三者の視点から見下ろすことのできる、極度の冷静さ』

後にある人物がグレーチェンのそうした一面を評した言葉である。この人物は更に分析を加え、言葉を重ねている。

『その一方で、自らの想いと判断への愚直なまでに忠実な真つ直ぐさと素直さを併せ持つのがグレーチェン・ヘルクスハイムだった』

——と。

帝国軍からの意外すぎる申し入れに同盟政府は整合した回答を直ちに返すことができなかった。すったもんだの挙げ句に、ようやく政府の出した回答は、グレーチェンにとってはやや意外なことに、交渉の受け入れだった。

げっそりと竦れ、目を落ちくぼませ、さすがに無精ひげはなかったにしても、その分、瘦け落ちた頬も隠しようがない。3DTVに現れたアイランズ国防委員長の姿に、グレーチェンは唖然としたものだ。姿はもとより、彼の発した言葉は更に彼女を驚かせた。

『最高評議会は本申し入れについて鋭意協議を進め、昨夜、この申し入れを受けて帝国との外交的協議に入る旨を決しました』

政府はアイランズ国防委員長を全権大使とする代表団の派遣を決定し、すでに彼らはハイネセンを離れている。帝国軍が交渉開催地として指定したフェザーンに到着するまでにはまだ三週間近い日数が必要だった。

JL二七には、代表が立ち寄る旨が通知されてきており、グレーチェンもその準備に追われている。ようやく準備の目処も立ち、とかく彼女を目の敵にするヒラーデ大佐の目からも逃れて私信を読み、これまでのあれこれに想いを巡らす時間を取れたのも久しぶりだった。

ヴェンツェル・ハインリッヒとロツティの名を同時に目にしたことが、記憶の余り深くない位置にしまい込まれていたエピソードを思い出させた。

グレーチェンは亡命前の自らの素性を他者に話し聞かせる習慣を持たない。同期生で、JL二七にも行を共にしているティフリ・ブラントンだけはなぜか例外で、彼らはグレーチェンが、ヘルクスハイマー伯爵家の娘であることを知っている。ヘルクスハイマー伯爵家がいわゆる門閥貴族の一員だったこと。同盟への

亡命の途上、ラインハルト・フォン・ミューゼル、ジークフリード・キルヒアイスとの間に奇妙な形で人生の軌跡を交差させた経験を持つことも。

そして、もう一人がロツティ・セーデルである。

士官学校時代、本来四年の年限が三年に短縮された上に、救国軍事会議のクーデターでさらに丸一ヶ月以上のロスを強いられただけに、休日とてろくにない毎日だった。そのまねな休日にロツティと連れだって外出した時のことだ。

「すつてきだなあ、ホント、素敵よ、もうホントに素敵っ!!」

亡命の経緯を話した時のロツティの反応は、グレーチェンをいささか驚かせた。

「何が……素敵……なの、ロツティ？」

「だって、ベンドリング少佐って、あなたのために地位も名誉もなげうってくれたんでしょ？」

「そ……それは、そうだけど……」

「それって素敵じゃない？ 身も捨て、身分も地位も捨て、家族までもすてて、愛するお姫さまのためのただ一人の騎士として異境の地に赴く、なんて!!」

「え、あ、あれ、ちよっと、どうしてそうなるの？」

「だってそうじゃない？」

ロツティの言葉がある意味の真実を穿っていることは否定できない。『友となってくれよつや?』とのグレーチェンの言葉通り、ヴェンツェル・ハインリッヒは彼女にとってかけがえのない友人^{とも}となってくれた。途中の事情といきさつのすべてを省略し、事を四捨五入すれば、確かにヴェンツェル・ハインリッヒが、すべてを捨ててまでしてグレーチェンのための『唯一の騎士』となる道を選んだ、と結論できなくもない。

「そうでしょ、そうでしょ！」

ロツティは一人で盛り上がっている。士官学校航法科の首席であり、近い未来の戦艦艦長は間違いないとまで評価されるロツティの別の一面を見せられた気がして、グレーチェンは目を丸くするばかりだった。私生活ではともかく失敗やうつかりが多く、『ドジっ娘』とか『優秀なのは足が地面から離れている時だけ』と言われるだけではなく、どうやらいわゆる『お姫さま幻想』という面もあるらしかった。

などと思っている内にロツティがさらにエスカレートし始めた。「これって、身分違いの恋よね、そうよ身分違いの、叶わぬ、儚い恋!!」

「身分違い……の恋?」

「だって、グレーチェンってどう見てもお姫さまじゃない。伯爵家の令嬢だから当然かも知れないけど、すごく綺麗だし、すらっとしてプロポーションだって抜群だし」

「プロポーションならロツティの方がずっといいじゃない」

『同期生の中で文句なしにナンバー1』と言われる、ロツティの豊かな胸をグレーチェンは指し示した。

「もうちょっと上背たっぱがあつたらね、ちょっとは自信持てるンだけどね」

他者に対してはそれだけ妄想と幻想と想像で盛り上げられるのに、どうして自分だけに現実のみに限定された視線しか持てないのだ、と時々言いたくなるのだが、この時もロツティは笑み一つ浮かべなかった。ちよつと伸び上がるようにして右掌をグレーチェンの頭頂部にかざし、彼女よりも頭半分小柄であることを示して、ロツティは肩を竦めた。

「これって重くて肩が凝るし、グレーチェンくらいのサイズが丁

度良いの。だってゼロじゃないし、バランス取れてるし、形だって抜群に良いし」

「誉めてもらったんだと思っておくわ」

決して長身とまでは言えないグレーチェンだが、士官学校の三年でずいぶん身長も伸びたし、手足の伸びやかさや身体のラインについてのロツティの評価は的外れではない。『ビスク・ドールを思わせる』と評される容貌は、確かに『すごく綺麗』と言われても誉めすぎということはない。もっとも、グレーチェンにしてみれば、一〇歳の時に『超絶的美形』を間近で目にしているのである。自分の容姿など、『あの者』ラインハルトに比較すれば論ずるに足りないと思うしかない。

ただ、よく分からないな、とグレーチェンは思う。自由惑星同盟とは身分のない社会を理想として建設された国家ではなかったのか。伯爵にしてもお姫さまにしても、もとはと言えば大帝ルドルフが側近たちに貴族を名乗らせた、その末裔ではない。本来なら、同盟にとつて最も忌避すべき敵であるはずだった。

なのに、3DTVソリウィジョンのドラマや小説などにはしばしば『高貴な身分』の人物が登場する。しかも、彼らの多くが主人公や、いわゆる正義の味方の役柄を割り振られているのが、グレーチェンの理解をやや超えていた。

「……で、そんなお姫さまに恋する……えっと、執事だっけ？ 家宰だっけ？ 主君のお姫さまに恋する家臣だなんて、これって身分違いの恋ってやつじゃないの、すごくロマンティック!」

「誰が執事で、誰が家宰だつて?」

「っもつ、じれったいなあ。そのベンドリング少佐のことよ」

「ヴェンツェル・ハインリッヒは家来でも従者でもないし、ヘルクスハイマー家に仕えていたわけでもない」

あの時、自分は『家来か、従者か?』だの、『ジークフリードよりも気は利かなさそうじゃ』などと遠慮会釈もない言葉をかけてしまっている。事実は事実だし、殊更に彼を貶めるつもりなどなかったのは確かだが、彼が自分のために捨ててくれたものの大きさに思い至れなかったのは自分の未熟さだった、と今では思える。

「それに彼もベンドリング伯爵家の出身だ。わたしと同じ帝国の貴族の出身よ、ロツティ」

なにげに補足した言葉がさらにロツティの妄想を刺激したようだった。たちまちロツティの両眼がはあと型(♡)になる。

「きゃあつ、彼だつて、彼だつて言つたわ、彼だつて!」

「ヴェンツェル・ハインリッヒは男性だから彼でしょう? ほかにどう呼びようがあるの」

「でも、じゃあ、ベンドリング少佐ってグレーチェンにとつてどういう人なの?」

「大事な友人よ」

「それだけ?」

「それだけ……わたしには大切な男性がいるって言つたでしよう?」

「知ってる。ジークフリード・キルヒアイス提督……でしょ」

ロツティの声が低くなったのは当然だった。ジークフリード・キルヒアイスが帝国軍最高の艦隊指揮官としての名声を確立したのがアムリッツアの会戦。同盟軍艦隊の七割が、宇宙の藻屑と消えた戦いで、同盟軍に決定的打撃を与えたキルヒアイスへの憎悪は、優れた敵将への敬意をしばしば凌駕する。士官学校の敷地外とは言え、教官や士官学校生徒の姿も珍しくない辺りだ。どこに

覗き込む目があり、そばだてられている耳があるとも限らない。

「金髪の孺子が無理なら、赤毛の若造の首だけでも奪って、墓前に供えねば、アムリッツアの戦没者の霊が浮かばれぬ」

時を一举に数千年も巻き戻したのではないかと思わせる台詞を公然と口にする同盟軍指揮官、特に猛将型の指揮官が多いのも事実だ。そんな中で、グレーチェンがジークフリード・キルヒアイスへの思慕を打ち明けることができた唯一の相手がロツティだった。

「でも、彼は所詮帝国の人。会うこともできないし、言葉だつて交わせない。手紙さえ送れないのよ。そんな叶わぬ恋だけを一途に追い求めて、振り返つてもくれないお姫さまのそばで、彼女の騎士はじつと彼女だけを見詰めている。もしも彼女が唯一の恋に破れて、悲嘆の淵に沈むようなことがあったら、必ずそばについてあげよう、いつかは振り向いてもらえるだろうなんてそんな大それたことは考えないで……」

「ロツティ、ロツティ……」

「でも、ひよつとしたら、ひよつとしたら……ああ、姫さま、グレーチェンさま、どうかお気づき下さい。このわたくしめの秘めたる想いを、あなたに捧げる真実の心を……」

ついにグレーチェンは切れた。自分一人の妄想の中で、まるでダンスでも踊っているかのようにくるくると身を舞わせているロツティの両肩を掴まえる。

「ロツティ、ロツティ・セーデル!!」

物凄いい形相で怒鳴られ、ロツティは「ヒッ」と息を詰まらせて硬直した。一瞬に妄想が覚めて、現実に戻ってきたようだ。はあと型(♡)になっていた眼鏡の奥の両眼が、くるりいつもの大きな黒瞳に戻る。

「わたしとヴェンツェル・ハインリッヒで遊ぶな!!」

「は……はい——ごめんなさい」

ロッティの勝手な妄想は怒鳴りつけて止めさせたけれども、以来、なにかにつけてヴェンツェル・ハインリッヒと知り合つて以来のことを思い出すようになった。亡命した当初、彼は彼女のことをグレイトヒエンさまと呼んでいた。彼とて三男坊とは言え伯爵家の出身だから、帝国にあつても身分の差などはなかったはずだった。最初からグレイトヒエンと呼び捨てられたとしても、苦情をいうべきものでもないし、実際に『さま付け』を止めさせたのは彼女自身だった。

それに、亡命の時、ヴェンツェル・ハインリッヒは言わなかった。グレイチェンがこの先どうなっていくのかを見届けたい、と。『彼女の騎士はじつと彼女だけを見詰めている』というわけでもないが、確かに形態としては同じではないか。あの時、確かに自分はヴェンツェル・ハインリッヒが求婚しているものと勘違いして、『幾つであつても女子は女子じゃ』と説教してしまった覚えもある。

では、自分は彼を、ヴェンツェル・ハインリッヒをジークフリード・キルヒアイスと同じような目で見ているのか。あるいは見ることができているのか。そう考えて、グレイチェンは愕然とした。彼女の心の中に回答がなかったのだ。単に過去に何も考えたことが無かった……のではなく、今、考えても答えが出てこない。そのことにグレイチェンは驚いたのだ。一体、自分はヴェンツェル・ハインリッヒを自分にとっての何者として見て、考えてきたのだろう。

それがグレイチェンの心の片隅に、わたしかま蟠る想いとなつて久しい。

それにしても、中途半端なことだ、と思わざるを得ないのは、J・二七の位置だった。フェザン回廊の同盟側出口に最も近い同盟軍の基地。それがJ・二七である。講和の交渉がまとまれば良し。両者が交渉の席を蹴り、帝国軍が同盟領への侵寇を開始したなら、その駐留艦隊は真つ先に血祭りに上げられるべき運命を定められている。言つてみれば、執行の猶予を与えられた死刑囚の立場に近い。

わずか三〇〇隻の駐留艦隊で一〇万を超える帝国軍に挑みかかったところで、勝ち目など議論するだけ愚かである。後退して同盟軍の主力艦隊に合流すれば、三〇〇隻という数も何らかの有意義な使い道も出てこようが、グレイチェンがかぶりを振る。ヒラーデ大佐の、一見カリスマを漂わせた哲学者的な容貌が脳裡に浮かんだ瞬間、一切の可能性が蒸発してしまう。

「戦いは数でするものではない。かつ、帝国軍の総兵力一〇万隻以上と言つのも過大すぎる。せいぜい数千隻とみるべきだ」

この期に及んでも、ヒラーデの視野は、彼が真実と認めた主観風景から一步も動いてはいないようだった。そんな彼が、帝国軍を前にしての戦略的な後退を認めるはずもなかったのだ。

執行猶予中の死刑囚であれ、なんであれ、年初来の怒濤のような時の流れが一瞬の澱みを作り、その中で奇妙な平穩の中で過ごしている。それが、宇宙暦七九九年四月でのグレイチェンの日常だった。無論、この時のグレイチェンには、バーミリオンに至る遙かなる道程の一步を踏み出したとの自覚は、まだなかった。

無数の星々の連なりが、銀砂をちりばめた二筋の巨大な流れと
なつて濃藍色の夜空を横切っている。惑星フェザーンの夜空を最
も特徴付ける『双児天の河』。一方は既に彼の手で征服された星々
であり、ラインハルト・フォン・ローエングラム公爵が、その刺
し貫くかのような視線を転じた先に広がるのは、これから彼の膝
下に屈することになるであろう星の群だつた。どのような形をと
るにせよ、ダゴン以来一五〇年余にわたつて永久運動のように続
いていた戦いは数年の内に終止符を打ち、星々はラインハルトの
支配を受け入れる形でのみ存続を許されることになる。星空を突
き通す蒼氷色の視線は、巨星の恒星焔を思わせて苛烈なまでに靱
い。

「ラインハルトさま、お時間です」

柔らかだが、芯に鋼の硬質さを隠した声が耳朶を打ち、頷いた
ラインハルトは黄金色のオーラさながらに髪を翻した。

帝国暦四九〇年三月三十一日。ラインハルトの直率する帝国軍主
力はフェザーンの制圧を完了し、フェザーンの夜空に新たな人工
の瞬きを加えていた。

音もなく降り注ぐ天然と人工の星空からの光の中、ラインハ
ルトが大広間に戻つた時、時計の数字が音もなく動き、四方の壁か
ら鐘の音の奔流となつて新しい月の開始を告げた。同時に、大広
間に参集した帝国軍首脳の口から一斉に『ブロージット!』の叫
びが上がり、ラインハルトみずから高々と掲げたクリスタル・
グラスの煌めきに應じて無数のグラスが宙に躍り、新たな光で大
広間を満たした。

やや遅れてパーティの会場外でも大歓声が上がつた。『ブロー
ジット!』、『万歳』の叫びが地を響動もして響き渡る。『皇帝

万歳!』、『皇帝ラインハルト、万歳!』など、ラインハルト
がフェザーンに到着して以来、兵たちの間ではごく普通となつた
叫びも他を圧して轟く。祝宴は高級士官だけでなく中下級士官か
ら下士官、兵士にいたるまでを対象として開かれており、参加し
た将兵たちの上げる歓声が市街を揺るがし、惑星そのものをさえ
揺さぶり上げたのだ。

「そんな無駄な……」

二〇〇〇万にも及ぶ全將兵に酒食を振る舞つと聞かされて、眉
を顰める主計士官もなくはなかつたのだが、『一日分の戦費より
も費用がかさむというのか?』とラインハルトに問い返されると
一言もなかつた。食事や飲料の準備、会場や式の運営などは地元
のフェザーン商人に入札させ、時ならぬ巨大な需要は彼らの帝国
軍への反感を大いに和らげる効果を生んだ。

フェザーン商人の中には先んじての買いだめと転売に走り、価
格のつり上げによつて第二のバランタイン・カウフたらんとした
者も少なくなかつたが、新たなカウフ財閥がフェザーンに出現す
ることはなかつた。一旦は急騰した各種物資だつたが、帝国軍が
ガイエスブルグ機動要塞に満載した軍需物資を放出し始めると、
価格は瞬時に買い占め開始以前のレベルを割り込んだ。濡れ手に
粟の暴利を夢見たフェザーン商人たちだつたが、夢の終わりは破
産申請のための裁判所の受付だつた。

「盛会だな」

グラスのシャンパンに軽く口を付けてから、ラインハルトは傍
らの赤毛の若者に声をかける。

「ええ、二三歳のお誕生日、おめでとございます、閣下」

「祝つてもらふようなことでもないし、わたしの誕生日を祝ふの
が目的はなかつたはずだぞ、キルヒアイス。第一、今日はわたし

の誕生日ではない」

ラインハルトの誕生日は三月一四日なのだが、その時点では帝国軍は未だフェザン回廊に入ってさえないなかったし、問題はそこではない。ラインハルトが公私の混同を嫌うことは、彼と行を共にすること一〇年余りを数えるジークフリード・キルヒアイスにとつては自明以前の事実と言つて良い。軍の将兵を参集させてのラインハルト個人の誕生パーティなど、検討にすら値しないはずだった。にもかかわらず、キルヒアイスは、ラインハルトの誕生日と遅ればせながらの新年の祝賀を兼ねた祝宴を提案した。

「俺の誕生日の祝いだって？」

最初、顔をしかめたラインハルトだったが、フェザン制圧完了で将兵の士気が上がっている一方、年末来の作戦行動で彼らが新年度祝賀の機会を逸しているとキルヒアイスに説かれると、しぶしぶながら祝宴の開催に許可を与えた。

「祝宴などいかなものか。まだ、自由惑星同盟が我が軍門に降つたわけでもない。公爵閣下の誕生祝いと新年祝賀に名を借りても、これが戦勝祝賀であることは明らかだろう。士気を上げるどころか、弛緩を招く恐れすら無しとはすまい」

オーベルシュタインが反対し、これに和す声も少なくはなかったが、ラインハルトが一度下した判断を翻すことはなかった。

「恐るべき冬を開始した時に、わたしはこれが『終わりの始まり』だと言つた」

祝宴の開会に際して、ラインハルトの最初の言葉がそれだった。「この祝宴をもって『終わりの終わり』と誤解する者があれば、直ちに考えを改めよ。吾らは未だ道の半ばにある。自由惑星同盟はまだ白旗を掲げおらず、最も有能にして強力な敵将はイゼルローンにおいて健在である。吾らが一時の勝利に安んじれば、次

の戦いの勝利の栄冠は敵の戴くこととなる。卿らに期待するや、大である」

再び『ブロージット！』の叫びが大広間を圧する。

「ブロージット！ 自由惑星同盟最後の年に――！」

ひとときわ良く通る声が、一同の鼓膜を圧して響き渡る。集中する無数の視線の中、声の主は昂然と傲然を相半ばさせた表情で、彼の主君に向けて高々とグラスを掲げていた。

半瞬の後、ラインハルトが端麗さを極めた微笑で声の主に頷き、グラスを掲げ返すと、周囲で拍手と歓声が沸き返る。大いに面目を施した声の主が頬を紅潮させ、グラスを一息に干すのが見えた。「若い連中は元気があつて良いな」

「私も若いですが、あれほどの元気はありませんよ」

ミッターマイヤーとミユラーが、表現は賛嘆であつても多分の皮肉の酸味を利かせた会話を交わしているのが聞こえて、キルヒアイスは苦笑した。声の主は、キルヒアイスにとつても同窓と言つて良い人物だったからだ。今の彼の関心はそこにはなかった。

「今回の祝宴の件ではお世話になりました」

近くにいた人物に向けて、キルヒアイスはその見事な赤毛の頭を一揖させる。

「感謝して頂くようなことは何もしていませんわ、キルヒアイス提督。私は、提督のご意見に賛成だと、ローエングラム公に申し上げただけです」

ヒルデガルト・フォン・マリィンドルフ……ヒルダは小さく微笑んでキルヒアイスの挨拶を受けた。胸元を飾るスカーフ以外は帝国軍中尉と何一つ変わらぬ服装をした彼女だが、その肩書きは本来ならば帝国軍中将に相当する幕僚総監代理である。ラインハルトにとつてキルヒアイスやオーベルシュタイン、あるいは帝国

軍の双璧とならぶ、最も信頼する相談相手と言って良い。

「その後、ドクトールからは連絡がありますか？」

キルヒアイスの声がやや低くなる。ヒルダも心持ち表情を硬くし、軽く顎を引いて肯定を示した。

『ドクトール』、国立文理科大学医学部のバウアーシュミット准教授は、昨年来、しばしばラインハルトを襲うようになった発熱と病臥に対して、未確認の難病の可能性を指摘した医師である。今は、マリィンドルフ家が主宰する医学研究基金から資金を与えられ、この難病の研究に当たっている。基金の主宰者はヒルダの父マリィンドルフ伯爵であり、研究成果の報告は伯爵のみに提出されることになっているのだが、無論、伯爵からは随時にヒルダに連絡が入っているはずだった。

数百を数える有人惑星を日々訪れていたのでは症例を確認するだけで数十年を要するだろう。バウアーシュミット医師は、基金から得た資金によって帝国全域の医療機関から症例の情報を掻き集めたのだという。数千万から億を超えるだろう症例情報を、彼は文理科大学の情報処理研究室に依頼して開発したコンピュータによるフィルタで篩い分けた。ただ、情報のフィルタリングには文理科大学のメイン・コンピュータでも能力が不足しており、一部の処理は帝立大学を始めとする多くの研究機関が引き受けることになった。従来であれば、研究機関同士の壁がそうした協力を阻んだだろうが、ラインハルトによる帝国社会の改革は確実に研究者の世界にも及びつつある。

億を越えていた情報は、二つして数千にまで絞られた。あとは、専門家としてバウアーシュミット医師の経験と分析能力、判断力がものを言う世界である。ここ一ヶ月余り、バウアーシュミット医師を巡っては密やかな噂が絶えない。曰く『彼はいつ眠るのだ？

彼はロボットなのか？』——と。

「ほぼ確実な症例は見つかりそうだとのことですわ。まだ、それ以上は何とも言えないということですね。」

硬質な美貌をかすかに翳らせて、ヒルダはラインハルトの後ろ姿を視野に入れた。豪奢な金髪のある者の姿は、ミッターマイヤーやミュラーを初めとする元帥府幹部との談笑の環の中にあつた。和平交渉が破れ、自由惑星同盟との戦端が開かれた場合の戦略論の花が咲いているのだろう。

「そうですか……」

「まだ海のものとも山のものともつかないような話ですし、かりに実在するとわかったとしても、通りすがりに買った宝くじが当たるような確率だと。これは受け売りですね。」

宝くじを買ったことがありますか……とヒルダに問われ、キルヒアイスは頭を掻いた。絵に描いたような堅物だった父は、ギャンプルは無論、少年時代のキルヒアイスがフリー・マーケットで景品目当てのくじ引きをするのにさえ、いい顔はしなかったものだ。

「宝くじ、どんなものかご存じですか？」

キルヒアイスは反問されたヒルダが今度は赤面した。

「どんなものかは……知っていますし、銀行が普通に販売していることも知っています。でも、買ったことはありません。」

「ドクトールは買ったことがあるようですね。それも当たったことはなさそうだ。」

つまりそういうことであり、ヒルダがマリィンドルフ伯爵に依頼して医学研究基金を設けてもらい、バウアーシュミット医師に資金を提供したのも、本当に万一の際の保険という色彩が強かった。自分たちにとって……キルヒアイスはためらいなく『自分た

ち』の中にヒルダをカウントする。もう一人は自明だった……ラインハルトは万一の保険をかけてでも守るに値する存在だったのだ。

バウアーシュミット医師の懸念が単なる杞憂に終わるとしても、自由惑星同盟との戦いはできるだけ早くに終結させねばならない。キルヒアイスにとって動かしがたい想いがそれだった。講和交渉が破綻する可能性は低くはない。重要なのは、そうした外交チャネルを常時開いておくことだ。交渉が破れたとしても、一度は交渉のテーブルに着いたという実績があれば、機会を捉えて外交の席を新たに整えることは難しくない。要は、憎悪が憎悪を招き、征服が叛乱を、叛乱が征服を呼ぶような救いがたい連鎖の中にラインハルトが引きずりこまれるような事態を避けること。いまのキルヒアイスにとって、単に一、二の艦隊戦の勝利よりも遙かに重い意味を持つ。

だからこそ、この祝宴についてのヒルダの応答が謙遜に過ぎないことをキルヒアイスは知っている。ヒルダは判断したに違いなかった。フェザーンの制圧が今次の作戦の『終わりの終わり』であるべきだと。既にラインハルトは帝国全土を征している。これにフェザーンを併呑すれば、帝国は人口の六五パーセント、経済力の七〇パーセント近くを手中にしたことになる。講和への交渉を拒否し、帝国とフェザーンへの門戸を閉ざしたとすれば、自由惑星同盟を待っているのは数年後の経済的な破綻と、国家としての枯死への一本道でしかないはずだった。

「古来、軍事的に対立した二つの勢力が、天然の要害で隔てられていない至近の距離で対峙してなお優武を保った例はない」

オーベルシュタインをはじめ、主戦派の高級士官たちが講和交渉に反対する最大の理由がそれである。すでにフェザーンは占領

下にあり、同盟領側の回廊出口は空白も同然で、フェザーン航路局の全ての航路データは帝国軍の接収するところとなった。もはやフェザーン回廊は『天然の要害』とは到底呼びがたい状態である。

ラインハルトの演説がどうあれ、戦勝祝賀の祝宴は兵たちに平和を思わせ、家族を思い起こさせる。忌避とは言わぬまでも、彼らが戦場以外の選択肢を未来に見いだすことが、自由惑星同盟との講和成立への不可避の条件だった。一方で『自由惑星同盟最後の年——！』と叫んだトウルナイゼン中将を始め、中堅クラスの提督たちの間にも、さらなる武勲と戦乱を求める意識が強い。止戦へ、彼らの意識を変えるのは容易ではないのだ。

無論、キルヒアイスが甘いだけの外交知らずでないことは、同盟に提示した条件の辛辣さが物語っている。同盟の各有人惑星と帝国との個別の通商関係締結、イゼルローン要塞の返還、回廊經由の通商路設定などを要求しており、これは自由惑星同盟の統一国家としての解体を要求するに等しい条項だった。ローエングラム体制の許、帝国が経済的に成功しつつある一方、自由惑星同盟の経済体制が破綻寸前で辛うじてつまずいていることはすでに明らかだった。帝国側からの資金と直接の通商の機会を提供されれば、自由惑星同盟の辺境宙域は雪崩を打って帝国の政治的・経済的支配下に移っていくことは間違いない。

「数年……ですな」

キルヒアイスから諮問され、カール・ブラッケはそう断じた。数年で、自由惑星同盟は事実上解体し、中枢星域のわずかな星系が、辛うじてかつての同盟の余喘を遺すありさまになるだろう。

その後は、彼らを軍事的に制圧するも、同じ人類としての同盟者として残すのも、すべては帝国側の選択に委ねられることになる。

それで良い、とキルヒアイスは思う。自由惑星同盟が信奉する共和制なる政治形態が残りに足りるものであれば、生き残る機会はある。彼らが生き残りたくないというのであれば、敢えて生き残らせる必要などない。

ラインハルトの『残すに価値があるというのであれば、生命を賭けてでも価値を証明せよ』なる価値観は、ややその苛烈さを緩めてではあったとしても、確かにキルヒアイスの共有するものだった。

一方は征服することを望んでいたが、他方は征服されることを願ってはいなかった——『正史』の言葉は、この時期の両国の関係を最も端的に表現するものと言って良く、多くの史家が『正史』の編者に対して賛辞を惜しまないと同時に、その修辞の巧みさに羨望を隠さない所以でもある。ラインハルトがフェザーンに兵を進めるまで、同盟政府は『我が国に対して、帝国軍の本格的な軍事活動が再開されるのは早くとも五年後』とする楽観論のまどろみの中にあつた。

だが、五年という数字の出所は泥酔者の記憶さながらに、あるいはそれ以上に曖昧であり、根拠に至っては街角の占い師の予言以上に薄弱だった。

「おそらくは、リップシュタット後の帝国軍の状況の速報を求められた政府の一部局の課長あたりが、十分な情報もないままに憶測と推測を積み上げた結果だっただろう。しかし、一度、責任者が機械的に入れたサインによって正式な見解となってしまうと、政府の中ではそれが動かしがたい事実として取り扱われ、評価も確認も行われないままに数字だけが一人歩きし始める。やがて、

情勢の変化に伴う検証の必要性さえ忘れられ、絶対的な真実として扱われるようになると、今度は逆作用が生じ始める。つまり、『真実』に反する情報や報告が検証の必要性ではなく、報告者の、組織に対する反抗の意思を意味するものとして受け取られ始め、彼らを異端者として扱ったための、ひいてはその排除理由として使われるようになるのである」

この時代が完全な過去として語られるようになった時期、ある歴史作家はこう断じ、最も事実に近い推測として広く受け取られるようになる。さらに、同盟政府と市民が、五年の猶予を、アムリツアで受けた致命的な軍事的損失を恢復する時間的猶予としては受け取らなかったことも事態の悪化に油を注ぐこととなった。その七割以上が失われた軍事力の再建には、すでに急速に悪化の度を加えている経済と財政の立て直しが前提条件となる。トリューニヒト一派に罪を帰する必要すらなく、同盟政府のすべての官僚から市民にいたるまでの共通の、唯一の選択肢が、労苦のみ多く市民一般の短期的支持の望めない政治的方針の採用よりも五年間の安逸と無為となったことに何の不思議もない。

「極度に硬直化した組織では特に珍しくもない官僚的な無責任さと言ふべきだが、無論、最終的な責任をとるのは報告の作成者や政策の意思決定者ではない。無数の市民がその生命によって、判断の誤りを償ふことになるのである」

さらに件の作家は続けているが、まさにこの時期の自由惑星同盟は、『無数の市民がその生命によって、判断の誤りを償ふ』わけばならない状況に追い込まれていた。

この時期、同盟政府は『華麗なる詭弁者』ヨブ・トリューニヒトの指導下にあつたが、人々の期待に反して、彼は『華麗なる指導力』を発揮しようとしなかった。周知のように、トリューニヒ

ト不在の同盟政府を、講和交渉受け入れの方向でまとめ上げた功績は国防委員長ウォルター・アイランズに帰せられるべきものだった。最終段階になって突如、その姿を現したトリューニヒトが彼の方針を支持し、対帝国の交渉全権大使に任命したとしても、である。

外交のテーブルに着くことは決定しても、それだけですべてが終わるわけではなかった。これまで同盟政府は帝国との外交を想定しておらず、帝国側から提示された講和条件の諾否からしてゼロからの検討が不可避だった。時間的にも余裕はなく、帝国軍からは『講和の意思があるのであれば、帝国暦四九〇年五月一四日まで全権代表団をフェザーンに到着せしむること』との期限を突きつけられてもいる。高速船を使ったとしても、ハイネセンからフェザーンまでは三週間近くの航程を要する。のんびりと議論している余裕はなかった。

「議論に費やしている時間は余りない。無条件に受諾できるもの、条件が必要なもの、最後まで留保すべきものの三つに分け、三つめについて帝国と取引できる代替の条件検討を中心に準備を進める」

講和条件の検討に当たっても、討議の主査として議論を主導したのはアイランズであって、トリューニヒトではなかった。トリューニヒトは、さすがに議論の席にこそ着いてはいたが、意見を問われた際の応答は『国防委員長を支持する』だけとなった旨が議事録に記載されている。僅かに議論に加わったのは、講和会議の開催場所について、『代表団がフェザーンに到着後に、帝国軍より指定する』とあった部分だけだった。

「場所が帝国軍の戦艦艦上などというのは、まるで降伏の使者ではないかね。同盟政府の名誉にかけても、それだけは受け入れ

られまい」

「帝国軍にしてみれば、吾々は叛乱軍でしかないわけです。名譽云々を言い立てても聞く耳はもってくれずまい」

アイランズは難色を示したが、トリューニヒトはなおも開催場所にこだわった。

「申し入れるだけでもやってみてはどうかね。少なくとも、これは外交交渉なのだよ、アイランズくん。交渉というのは、なにもかも相手の言いなりになるという意味ではないと思うがね。いかがですか、ビュコック提督？」

「相変わらず、口だけは達者な御仁じゃな。相手の意向を打診するくらいはFTL一本のことじゃからやってみれば良からうて。無論、お前さんも交渉というのは相手のあるものじゃということも心得済みじゃろうから、拒否されても我が儘は言いつこなしじゃぞ」

「駄々っ子扱いには恐れ入りますね。もちろんのことですよ、提督。相手があつてこそその交渉ですからね」

トリューニヒトの要求は直ちに事務化された。とは言え、駐フェザーン弁務官事務所はすでに機能しておらず、ヘンスロー弁務官もヴィオラ大佐も帝国軍に追われる身となつて消息は知れない。ハイネセンからの連絡はJL二七基地へ送られ、フェザーン回廊入り口宙域に進出した同基地の駐留艦隊を経由して帝国軍に送達されることになった。必然的にJL二七基地は対帝国軍の軍事的のみならず、外交上の最前線基地として位置づけられるようになっていく。

同盟政府からの問い合わせに対し、帝国軍の回答は即答に近かった。

「講和会議開催地は代表団到着後に追つて指定するが、帝国軍戦

闘艦艇上を除外することは確約する」

トリューニヒトは満足し、以降はほとんどの時間を沈黙の裡に過ごし、ビュコック大將に皮肉られている。

「あれでは、やつの顔写真を貼り付けた人形でも置いておいた方がはるかによかつたじゃろうよ。何しろ、人形はしゃべらんからな」

ビュコック大將のコメントは、彼らしい皮肉と毒舌を交えた辛辣なものではあつたが、事実と出席者の率直な感想を正確に述べたものだつた。

「トリューニヒトのやつは、とにかくそこに座っているだけでうざりたいからの」

アイランズが、同盟の政治面の統轄に忙殺されている一方で、ビュコック大將は軍事面での全責任をその双肩に担うこととなり、こちらでも多忙を極める状況だつた。

当初、交渉代表の軍事面の補佐役としてビュコック大將の名が上がつていたのだが、これはアイランズの判断で取りやめとなつている。

「万一にも交渉が破れ、帝国軍がその場でペンを銃に持ち替える可能性を考えるなら、ビュコック提督にはハイネセンで緩急ある時の備えとなつて頂く必要がある」

代わつて代表に加えられたのがドーソン統合作戦本部長だつた。枯れ木も山の賑わいという言葉もありますから」

ビュコックは、自身の毒舌に伝染性があるとは思っていないが、この人事を定めたときのアイランズの言葉にはその可能性に思いを致さずにはいられなかつたし、また彼が事実を指摘していることも認めざるを得なかつた。フェザーン行きを告げられたドーソンはその場で固まつてしまつた上、その後も消失した顔色と食欲

を恢復できなくなつてしまつたのだ。

「やれやれ、仕事を増やされてしまつたわい」

ドーソンが同盟軍の軍令面での最高統括者であるために、彼の決裁がなければ何事も動かない。小心者の本性を露わにして作戦本部長の席に座して固まつているだけになつたとは言え、ともかくこの『ジャガイモ野郎』なり『伍長』なりに仕事をさせねば、ビュコックの仕事も進まない。フェザーン方面は一応の小康状態を得ているとは言え、イゼルローン要塞は依然としてロイエントール指揮下の大艦隊の包囲下にあり、戦闘は続いている。滞つていた第一四、第一五艦隊の整備の推進、フェザーン回廊方面からの帝国軍侵入に対する迎撃戦略の策定、兵站線と情報網の再整備など、膨大な業務がビュコックの判断と決裁を待っていた。さらには、ドーソンの不在中、作戦本部長代行はビュコックの担務するところとなる。業務の引き継ぎも必要である。

そんな中、宇宙艦隊総参謀長のオスマン中将、ビュコックの高級副官ファイフェル中佐が心労の余りに相次いで倒れるというアクシデントが起こり、ビュコックを嘆息させた。

「このままでは、全員過労死ということにもなるつて」

士官学校戦略研究科からチェン・ウー・チェン大將が総参謀長に転じ、副官にはスーン・スールズカリッター少佐を得て、宇宙艦隊の人事は事なきを得たのだが、この時に情報部のヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング少佐が中佐に昇任の上、正式の対帝国諜報課長の肩書きを帯びている。

「艦隊参謀部の情報先任参謀というのも考えたんじゃがな。こつちの席の方が色々やりやすかるうし、儂らにとつても帝国軍に詳しい人間が居てくれるのは助かる。いつそセペダを更迭してあとを襲つてもらふかの？」

帝国軍のフェザーン侵攻が開始されて以来、情報部長のセベダ中將も半ば職務を放棄し、機械的に書類を処理するだけの小ドローン状態に陥っている。宇宙艦隊参謀部の情報参謀からスタッフを出して情報部の運営を補佐しなければならぬ状況だった。

ビュコックに言わせれば、このままでは全軍の運営の権限と責任が宇宙艦隊に集中してしまい、皮肉なことにビュコックを中心とした独裁体制とも評されかねない状態に陥ってしまう。

「独裁と言われようがどうしようが、先の知れたことじゃが、権限が集中してしまうのだけは何とも拙い。艦隊が万一にも壊滅したとしても、戦争を終わらせる仕事をする人間は必要なんじゃないか」

帝国軍との戦端が開かれることになれば、ビュコックは艦隊を率いて戦場に出なければならぬ。戦略状況、兵力、装備のすべてにおいて圧倒的な劣勢にある以上、帝国軍と戦場にまみえた場合に、ビュコック自身が生きて戦場を後にできるとは思っていない。宇宙艦隊の首脳部が失われた場合、同盟軍の中枢機能が一挙に失われる。ビュコックの懸念はそれだった。

「それは……とても、無理です」

ベンドリングにはベンドリングの論理がある。グレイチェン・ヘルクスハイムの士官学校入学後は正規の同盟軍士官となったとは言え、わずか三年余りでしかない。いきなり情報部長の席に就いたところで、組織は動かないだろう。それに、地位に伴う責任は行動の自由を奪うものだ。七年前、もし帝国に妻子があり、なにがしかのより責任ある肩書きを帯びていたとすれば、マルガレータ・フォン・ヘルクスハイマーへの同行は、あるいは彼の選択肢になかったかも知れない。

グレイチェンのことを考えるなら、対帝国諜報課長などという

地位もできれば願いたいところだが、ベンドリングにも軍人としての義務感がある。かつ、彼らを迎え入れてくれた『祖国』の危機を無視できないのも事実だった。グレイチェンについては、彼女の希有な……と彼の信じる……資質と運の良さに運命を委ねるしか、今のところ選択の余地はない。現在の状況で、まさか彼女一人をJL二七から呼び戻すことなどできないし、恣意剥き出しのそんな人事を実行に移すものなら、彼女はあの紫水晶の瞳を静まりかえらせて詰問してくるだろう。

「妾を侮辱するか、ヴェンツェル・ハインリッヒ？」

こうしてベンドリングは中佐として対帝国諜報課長の席に就くことになった。いつの間にか、亡命前の帝国軍でのそれよりも高位の階級を得ることになったわけだが、ベンドリング自身にはさしたる感懐はない。沈みかかっている船の船長、あるいは倒産寸前の会社で管理職と言うよりも経営陣に登用されたようなもので、祝杯を上げるようなこととは思われなかったのだ。

最初の仕事となったのが、帝国軍を迎撃するための兵力の整備と作戦の検討会議だった。

会議冒頭、ベンドリングは、これまでに国防委員会で無視され続けてきた情報とJL二七からの偵察情報から、フェザーンに侵攻した帝国軍の総兵力が一〇万隻を超えたとの見積もりを報告した。

「かつ、まだ完全には確認できていませんが、フェザーン方面から脱出してきた交易船などからの情報を勘案すると、帝国軍は機動式宇宙要塞を伴っている可能性が高いと思われます」

「機動式宇宙要塞？」

「はい、イゼルローン・クラス、あるいはやや小型の宇宙要塞に超光速航行用エンジンと通常航行用エンジンを取り付け、移動を

可能にしたもので、空前の規模の侵攻作戦に際して、帝国軍は兵站基地そのものを伴うことで補給に万全を期したものだと思われる」

ベンドリングの報告の意味が了解されると、出席者の間に失望のため息が広がり、室内の空気は落胆の色が急速にその濃さを増していった。フェザーンは必ずしも農業生産に優れた惑星ではない。工業生産能力は高いが、原材料や食糧は同盟や帝国の辺境宙域からの輸入にたよる割合が大きい。一〇万隻強の戦闘艦艇と二〇〇万にも及ぶ将兵による占領は、フェザーンの生産能力に大きな負荷をかけ、帝国軍が間もなく補給に欠乏を来すのではないかとの見方もあったが、ベンドリングの報告はその可能性を否定するものだった。

つまり、帝国軍がフェザーンから短期に退く可能性はないと考えるべきであり、外交交渉の失敗は、帝国軍の同盟領内への全面的侵攻に直結します」

予想される帝国軍の侵攻に対して、現時点でフェザーン方面へ出動可能な制式艦隊は第一艦隊約一万五〇〇隻の他は、編成途上である第一四と第一五艦隊の兵力を合わせて約一万数千隻強があるだけだった。

「なんとか第一四と第一五の両艦隊を制式艦隊として使えるレベルまで兵力を増強する。やれることは全てやる」

それがビュコックの判断であり、それ以外の判断もしようがないところだったが、それすら容易ではなかった。新造艦艇の工期短縮と早期就役、損傷艦艇の修理スケジュールの繰り上げ、辺境警備艦隊の根こそぎ動員が行われたが、新戦力の追加がはかばかしくは進まないことは間もなく明らかになった。新造艦艇は、救国軍事会議のクーデター後のトリューニヒト一派による妨害に

よって起工自体が大きく滞っており、新たに予算を追加しても竣工の繰り上げの期待できる隻数は幾らも増えはしなかった。また、辺境宙域の兵力も大半が、すでにイゼルローン要塞方面への増援に動員済みであり、辛うじて警備艦隊の兵力が残されているのは、辺境宙域とは言え、重要な鉱産資源の供給宙域に限られている。

同盟中枢部の生産能力への影響を無視しない限り、この宙域からの兵力引き上げは不可能だった。最終的に三個艦隊合計で三万五〇〇隻余り。それがビュコック麾下の宇宙艦隊に編成できたぎりぎりの数字だった。

「イゼルローン要塞のヤン提督と、増援に赴いているウランフ提督を呼び戻してはいかがでしょう」

チェン・ウー・チェン参謀長がそう提案し、一同を驚かせたのもこの会議においてである。

「ヤン提督の智略とウランフ提督の勇猛さに加え、両提督指揮下に入っている駐留艦隊と第一艦隊、さらに増援部隊の兵力は今の我が軍に極めて貴重なものです」

彼らをイゼルローン要塞攻防に釘付けにしてしまふのは、焼きたてのパンを冷蔵庫で固くしてしまふようなものだ……後世、チェン参謀長の為人を語る上で必ず引用される言い回しでの主張に異論はなく、ヤンに対して「責任は宇宙艦隊司令部がとる。最善と信じる方策をとるように」との訓令送付が決定された。同時に、ウランフの第一艦隊をヤンの指揮下に入れる旨の命令が併せ送られることになる。

「救いがあるとすれば、まだイゼルローンにヤンとウランフが居てくれることですね。彼らが冷蔵庫のパンではなくて、焼きたてのパンになってくれることを期待しましょう。私としては十分に期待できると思っていますよ」

会議をそう締めくくり、チェン・ウー・チェン参謀長は、中断された昼食を再開した……と伝えられる。

アイランズ国防委員長とボネ情報委員長、そしてドーソン作戦本部長を中心とした講和代表团二〇数名がハイネセンを離れたのは四月二三日。同盟政府が講和交渉受け入れを発表してから八日後のことであり、この日、ハイネセン宇宙港には一〇万を超える同盟市民が、代表团の出発の見送りに参集した。

この時期に至っても多くの報道メディアは、帝国に対する観念的な敵意と反感に基づく強硬論を報道し続け、『帝国との妥協を断固拒否すべく、同盟万歳の歓呼で市民の総意を結集しよう』などと煽り立てた。

「多くの市民が、不安と恐怖、絶望の混淆の中、一縷の微かな希望の色彩を帯びた表情のまま、無言でシャトルを見送っていた。一部に同盟万歳の声も聞こえたが、市民のほとんどはそれに和すことはなかった」

代表团出発の様子を、あるメディアはそう伝えている。

代表团を乗せ、二隻の軽巡航艦と五隻の駆逐艦に護衛された高速連絡船がフェザン回廊を至近の位置に望む宙域に達したのは、出発から二〇日弱を経過した五月一二日。交渉に向けて最終的な準備と補給の目的でJ-二七に寄港した彼らを、会議の開催場所を指定する帝国軍ガイエスブルグ機動要塞とする。帝国暦四九〇年五月一五日までに、指定の座標に達せられたし」

フェザン占領後、キルヒアイスが軍事面の統轄者として多忙を極めていたこともあり、常時ラインハルトの左右に待っているのはオーベルシュタイン総参謀長と、幕僚総監代理を務めるヒルダの役割となった感があった。軍事と謀略に関わる枢機についてはオーベルシュタインが総参謀長として諮問に与る立場にあるのは当然のこととして、政治・外交・戦略すべてにわたつてのラインハルトのヒルダへの信頼の篤さは周囲の目にも明らかだった。ラインハルトにしてみれば、ヒルダの豊かな知識とセンスを貴重極まるものと思われたが故の、当然の任用だったが、周囲の視線は必ずしもそれだけではない。

「必ずしも才能だけの問題ではあるまい」

囁きは、希有の美貌に恵まれたラインハルトと同席してさえ、まったく遜色のないヒルダの容貌の端麗さを指してのことだったが、自身たちに関するそうした噂話に最も無関心なのがラインハルト自身だった。彼がヒルダの意見を求めるのは、単に対同盟の政戦両略のみならず、帝国の統治体制から三つの星間国家を複雑に絡みつけている経済体制にまでわたる広汎な分野にわたった。

キルヒアイスやオーベルシュタインに諮り、回答を得ている場合ですら、この聡明な伯爵令嬢の思案の扉を叩いたことも一再ではなく、それが時に深更に及ぶこともあった。

事実ではなかったが、フェザン人の間で、すでに就寝していたヒルダを私室に訪ね、ヒルダが夜着の上にガウンを羽織っただけの姿で応対したなどという噂が囁かれ始めるまでに時間は要さなかった。

「フロイライン・マリーンドルフは女性です。噂に過ぎないとは言え、就寝中の女性の居室を深夜に訪れて、用談なさったなどというのは明らかにラインハルトさまへの悪意に根ざすものです」

一日、激務の間を縫って訪れたキルヒアイスから生真面目な視線を突き込まれて、さすがにラインハルトは驚いた。

「フロイラインが女性だと言うことは心得ているぞ、キルヒアイス。フロイラインを迎えるためにわざわざ『ブリュンヒルト』に改装まで施したんだからな」

基本的に男性オンリーの軍隊である帝国軍であり、その総旗艦たる『ブリュンヒルト』は、その名にも関わらず、艦内のあらゆる施設は男性搭乗員のみを意識したものだった。征旅に従うヒルダのために、『ブリュンヒルト』に女性用の各種施設を追加すべき旨を進言したのはキルヒアイスであり、そのための改装工事が『^{フィンブル・ベト}恐るべき冬』作戦準備の細やかな一項目に追加されたのは、準備も終盤にはいつてからのことだった。

「しかし、俺は夜中にフロイラインの部屋に押しかけるような真似はしていないぞ」

ラインハルトにも反論はある。いくら厚く信頼し、あらゆる問題についての相談相手として期待しているとは言え、就寝中だった若い未婚の女性と、その居室で話し込むほど自分は礼儀を弁えない人間ではない。

「部屋までお訪ねになったわけではなくとも、呼び出されたことはあるではありませんか？」

だが、キルヒアイスは容赦がなかった。彼とて一三年来のこの友人、自らの半身とまで思う金髪の若者が、ヒルダに対して怪しからぬ振る舞いに及んだなどとはつゆほども思っていない。

彼がローエングラム伯爵家を嗣ぐ前、伯爵家の門地を狙った政略結婚の申し入れは少ない数ではなかった。時に美貌の娘や、養女、極端な例では使用人の娘を彼の寝室へ送り込もうとし、実際に送り込んできた大貴族も片手では足りないかも知れない。ライ

ンハルトは彼女らを、居室に迎え入れ、飲み物で饗応し、そしてキルヒアイスとともに自ら丁寧に自宅まで送り届けたのだ。ラインハルトが望めば、ローエングラム伯爵家当主の寝室は、伯爵家創設から一年を経ずしてあらゆる花で埋め尽くされたに違いないが、彼にその資質は希薄だった。

だが、同時にラインハルトの無頓着さ、ある意味での視野の特異さも知悉しているキルヒアイスでもある。

「う——」

図星だったらしく、ラインハルトが絶句し、一瞬視線を宙に逸らした。

「なさつたのですね？」

「あ……ああ、そうだな、一、二度……だったかな」

「一、二度……ですか？」

「あ、いや……その五、六度だったかも知れない。気になることがあつて……フロイラインの意見を聞く必要があると……いや、どうしても意見を聞きたいと思つたのだ」

キルヒアイスはため息をついた。これあるかな、我がラインハルトさま。ヒルダが女性であることへの認識と、彼女を私室から執務室へ呼び出した時間帯とがまったく別のレベルの事実としてしか認識されていないのだ。かつて、リンベルグ・シュトラッセで居を共にしていた頃、ラインハルトが深夜にキルヒアイスを呼び出すことなど日常茶飯事だった。ラインハルトの言う通り、たいていの場合、それは必要なことだったのだが。

「だから……フロイライン・マリィンドルフは女性なのです。その女性を、帝国軍最高司令官であるラインハルトさまが深夜に呼び立てる。敵意を持つ者なら、ラインハルトさまがフロイライン・マリィンドルフを……つまり、よからぬ目的で呼び立てたと噂す

るでしょう」

この時期、ラインハルトは総司令部をフェザーンの高級ホテルに移しており、ヒルダもまた同じホテルの一室に起居している。これが『ブリュンヒルト』艦上であれば、ラインハルトの名譽を穢すような噂の徘徊などあり得なかった。いかに人選し、背後関係を確認してあっても、ホテルの従業員の大半はフェザーン人なのだ。

キルヒアイスが驚いたのは、ラインハルトの白哲に一瞬、刷毛で掃いたように鮮やかな紅が差したことだった。キルヒアイスにしてみれば、女性とのよからぬ噂を聞かされて赤くなるラインハルトなど、まったく想像の外だった。一体、何を赤くなっておられるのか、ラインハルトさまは——と。

が、半瞬の狼狽に似た表情が通過すると、すでにラインハルトの表情はいつもの彼のものだった。厳しく強ばった頬の線が怒りを示して、一瞬の血の気は跡形もなく退場している。

「俺が、フロイライン・マリンドルフに対して、ゴールドンバウムの歴代皇帝どもと同じことをしたか、しようとした……とそう噂しているのだな、フェザーン人は？」

「そうです。ですから……」

「分かった。気づかなかった。フロイラインを夜中に呼び立てるようなことは二度としない。俺はあんなやつらと同じに見られるなど我慢できない」

安堵して、キルヒアイスは微笑った。ラインハルトが一瞬だけ見せた赤面の理由を知りたい気分がほんの少しだけ動いたが、ゴールドンバウム歴代の淫蕩な皇帝たちとの同列視への拒否反応は、まさに期待通りだった。

「それを聞いて安堵しました、ラインハルトさま」

ヒルダがキルヒアイスの進言について知ることはなかったが、そのキルヒアイスから届いた『お疲れにならぬよう、夜はよくお休み下さい』とのメッセージと、実は『五、六度』程度ではなかったラインハルトからの呼び出しがびたりとなくなったことで、概ねの事情を察するには十分すぎた。

そんなできごとがあつた時期に、ヒルダが、ラインハルトとキルヒアイスの両名に対して上申したのが、フェザーン回廊航路封鎖解除だった。占領当初、帝国軍は同盟領に対するフェザーン商船の出港と帰港を禁止したが、これを解除し、フェザーン商船の同盟領への通行を許可すべしとするものだった。

この措置を一時のものに止めざるを得ないことは、帝国軍首脳の了解するところだった。

フェザーンの人口は約二〇億。この人口の過半が、星系と同じ名を持つ惑星に居住しており、惑星フェザーンはこの時期の人類社会でも最も人口の多い惑星の一つである。もともとは余り居住には適さない高温の砂漠に覆われた惑星であり、二〇億以上の人口を収容するためのライフラインは、同盟首都星や帝国首都星を遙かに凌ぐ稠密さを誇っている。この人口とインフラストラクチャを支えるのが、フェザーンの巨大な経済力であり、帝国と同盟を網羅するフェザーン交易商船の航路網だった。

同盟領との交易禁止は、同盟の経済活動に対する血液の流通を停滞させることにもつながり、同盟の経済力を弱め、長期的には帝国軍の戦略に資するところが大い。だが、他方で、フェザーン自身もまた帝国や同盟との交易で自らを支えているのであり、その一方を封じられればフェザーンの経済活動への悪影響も無視

しがたいものとなる。フェザンと謂えども、すべての市民が豊かで高レベルの生活水準を享受しているわけではなく、同盟や帝国以上に貧富の差は明確だった。ただ、そうした低所得層のフェザン市民も、フェザン社会全体が好況な状態にあることで、同様な境遇にある同盟や帝国の市民よりも相対的な豊かさの中にあるというだけのことなのだ。

「ですから、フェザン経済全体が下降傾向に入るようなことがあれば、たちまちこれらの下層に位置する市民が影響を受けます」同盟に対する渡航禁止解除に対して、帝国軍首脳が良い顔をしないのは当然で、キルヒアイスですら、ヒルダに説かれるまでは経済という微妙極まる代物への理解は困難だった。

「それが必然的な社会現象から起きた不景気ならばともかく、帝国軍の規制によって自分たちの生活が苦しくなるとなれば、フェザン市民は黙っていないでしょう。すでに、同盟の弁務官事務所の幹部はほぼ捕らえていますし、侵攻時に帝国軍の概ねの兵力は察知されています。これ以上の航路封鎖は害のみあって益はないものと考えます」

ラインハルトは、ブラッケとリヒター……近い将来の財務尚書と民政尚書……の意見も徴した上でヒルダの進言を採用した。同盟との講和交渉を直近に控え、フェザンの治安悪化を避ける必要があったことも確かだった。

航路封鎖の件に加えて、ヒルダが懸念していたのは、フェザンのかつての支配者の行方だった。フェザン自治領主アドリアン・ルビンスキーは、帝国軍侵攻の直前に姿をくらまし、現在に至るもその所在は不明のままだった。

「講和会議の開催場所について、ご検討頂きたいのですが、よろしいでしょうか？」

同盟政府から要求された開催場所への配慮については、ラインハルトは彼らしい無論着さで『そんなに我が軍の戦艦艦艇上が嫌なら、除外すると回答しておいてやれ。それで話がスムーズに進むなら、それに越したことはあるまい』と応じている。

「一度、帝国軍艦艇は会場にしないと回答したのだ。いまさら言葉は翻せない」

ラインハルトの反応は、ヒルダの予測範囲内だった。

「ガイエスブルグ機動要塞上に会議場を設定してはいかがでしょうか。詭弁かも知れませんが、機動要塞は戦艦艦艇ではありません。言葉を違えたことにはなりませんし、なによりも警備の万全を期することができます」

「——フロイラインはルビンスキーを警戒しているのだな？」

「以前にも申し上げましたが、ルビンスキーが閣下に対抗しようとするならば、テロによる必要があります。ルビンスキーは地下に潜っていますが、閣下ある限り、フェザンの支配者に返り咲く機会はありません。あらゆる機会を捉えて、閣下を害そうと試みるのではないのでしょうか」

ラインハルトの眉が僅かに不愉快そうに曇った。自らは姿を見せずに、他者の背に刃を突き立てようとするルビンスキーのやり方に不快感を禁じ得なかったのだろうが、ラインハルト自身が経験してきた戦いの中には、謀殺や暗殺、宮廷での隠微な闘争も少なくなかったのも事実だった。

「可能性は否定できない……いいだろう、同盟の代表団にはガイエスブルグを会場にする旨を伝えよう。指示をお願いする、フロイライン」

「承りました、閣下」

ラインハルトの執務室から退出しながら、ヒルダは胸裡に兆し

た微かな不安をなお拭い得なかった。おそらくラインハルトはフェザーンの黒狐のことなど、ヒルダが退出すると同時にその脳裡から拭い去っているに違いない。彼にとってルピンスキーは所詮、権謀をこととするだけの、同盟のヤン・ウェンリーにくらべれば、評価に値しない人物に過ぎない。だが、史上多くの英雄や大人物が終わりを誤る陰には、そうした取るにたらないとされた人々の動きがあることも否定できないのだ。まして、ルピンスキーは少なくともフェザーン一国を支配していた人間である。無視して良い存在ではなかった。

航路封鎖が解かれると同時に、同盟領宙域を飛び交っている無数のフェザーン交易船への通信制限も解除された。これも当然の措置で、本国からの情報を完全に封鎖されてしまっただけは交易などできるものではない。帝国軍は主要な通信回線への傍受を継続したが、通信量は膨大であり、かつ多くの交易商社が情報の漏洩防止目的での暗号通信を採用していたことから、すべての通信を監視するというわけにも行かなかった。

そして、そうした通信の中に紛れるようにして、フェザーンとハイネセンの間で隠微な会話が交わされたのは、同盟政府の代表団がJL二七に到着した直後のことだった。

『ガイエスブルグ機動要塞というのは困ります。せっかく帝国軍艦を会議場にするだけでは免れたのに、これでは帝国軍の総旗艦を会場にした方が未だましというものではないですか。千載一遇の機会を、これではみすみす逸することになるが……どうするおつもりですか？』

機械的に変調され、複雑な暗号化を施された通信路を経てきた

声は歪み、時として掠れて消えそうにさえなるが、数千光年の彼方に座す話者の苛立ちと、幾分かの恐怖の彩りは薄れていなかった。

「さようですな。敵もさるものというべきでしょうか」

浅黒い肌、精力的な、魁偉と言っている容貌と禿頭。がつしりとした長身の男性の両眼は、しかし、口調とは裏腹に射貫くような光を失っていない。アドリアン・ルピンスキー。前フェザーン自治領主がゆつたりと腰を据えているのは、フェザーン市の地下深く、人知れず建設されたシエルターの一室だった。

『冗談で済まされては困りますね、自治領主^{ランデスヘル}。これは笑い事ではない。帝国軍がフェザーンに入ったことで、亡命貴族たちの資産を同盟政府の財政に組み入れることも難しくなった。これでは皇帝の亡命を受け入れた意味がないというものではありませんか、自治領主^{ランデスヘル}』

「さよう、笑い事ではない。このまま同盟と帝国に手を結ばれたのでは、私自身も立つ瀬がないし、永久に浮かび上がることもできなくなる。私にとつても死活問題である以上、議長閣下には最後のカードを切って頂かなければなりません」

『最後のカード？』

つかの間の沈黙が先行し、それから通信路越しの気配が微かに変わる。それとはつきりとは分からぬものの、相手にとつて明らかに思い当たるものがあり、ルピンスキーの提案を納得した気配と言つて良い。

『……口実は？』

「閣下にお任せしましょう。当方としては手段を提供しましょう。いずれ、閣下も手の者を代表団に参加させておいでのことでしょうから、あとは閣下の腕に期待させて頂くということではないか

な？」

『成功の確率は？』

「一〇〇パーセントを保証できるような賭はあり得ますまい。確率はそれなりに高められるとしても、常に失敗の恐れはある。だが、やらなければ、舞台は吾々を無視したまま、どんどんと場を進めていくだけのことですからな。戦いと同じでしょう。それとも閣下は一〇〇パーセントの保証がなければ、やれぬと仰せか？」

再び通信路が沈黙する。躊躇いと、失敗への恐怖。陰謀の成功がもたらす果実の巨大さと失敗が招くであろう反動の巨大さを秤にかけるだけの時間。通信機のコンソールが、通話時間の限界……これ以上の通話継続が帝国軍による傍受を受ける危険性を警告し始める寸前、通話が再開した。

『了解しました。カードを切りましょう。手段の受け渡し場所と相手は直ぐに連絡します。宜しいですな』

「確かに承知しました、最高評議会議長閣下」

『宜しくたのみますよ、自治領主』

わざとらしく相手の肩書きを口にするルビンスキーに、同じく皮肉な口調でルビンスキーの肩書きで応じた声が唐突に切れた。同時に、コンソールにデータ通信の着信が表示される。

逃亡生活を共にする一〇名にも足りない側近の一人を呼び、着信したデータとともに指示を与えると、ルビンスキーは別の側近を呼び、短く指示を与える。会話の中、帝国首都の名とキュンメルという固有名詞が漏れ聞こえた。

指示を終えたルビンスキーは、地下とは思われぬほどに高く確保されている天井を見上げる。厚いコンクリートと岩盤と、その上のフェザン市街をすら貫いて宇宙を見上げるかのような視線だった。視線の先には黄金の髪の覇者が、今にも全人類をその膝

下に屈せしめんとして蒼氷色の眼差しを宇宙に突き刺しているはずだった。

それはそれでよい。人類が、永久に三分された状態でいなければならぬとする法則や絶対的な原理がこの宇宙に存在するわけでもない。無論、地球教徒どもが夢見るような、地球を中心とする祭政一致による統一などもあり得るはずはないし、万一にも実現されたとすれば人類の歴史を数千年も巻き戻すようなものであり、おぞましきの極致と言ってい。

今回は彼らの力を借りる。今回の目論見が潰えた場合の『保険』についても帝国内部に張り巡らされた彼らの存在あってこそ機能期待できる。逆に、今回の『最後のカード』、あるいは『保険』がその役割を果たした時、地球教徒もまたその力の大半を失うことになるはずだ。いや、彼ルビンスキーはそうさせるのだ。

地球教徒の力の大半は、その秘密性にある。帝国政府なり同盟政府が地球教徒の存在と力を認識すれば、必ず地球教の弾圧に向かう。世俗の権力が、宗教的権威による二重の支配を最も忌避すべきものとして排除の動きを起こすのは、人類が地球上に歴史を刻み始めて以来、変わることはない必然な動きである。そして、世俗権力からの攻撃に対して、地球教は彼らに抵抗できるだけの物理的な力を所有しないことが致命傷となるだろう。地球教などという八世紀前の亡霊はさつさと地球を墓所として、過去に消え失せてしまえばよいのだ。いや、彼らを跡形もなく歴史の闇の中に葬り去ることが、ルビンスキーの復活への絶対条件でもある。

「役に立つまでは主役気分で踊りつづけるがいい。その代わり、出番が済んだら、さつさと消え去れ、亡霊どもめ」

ルビンスキーの呟きが虚空に漂い、やがて消えた。